広島東洋カープが「カープ女子」のライフヒストリーに与える影響

生涯スポーツゼミナール　1316030　下満　太一

１．研究動機・研究目的

日本に古くから根付き、今でも多大なる人気を誇るプロ野球は、セ・リーグ、パ・リーグの 2 リーグ制に分かれており、12 球団から構成されている。その中に所属する広島東洋カープは、かつて 12 球団一選手の総年俸が低く、親会社を持たない個人経営であること、25 年間リーグ優勝から遠ざかっていたことから「弱小貧乏組織」というイメージが世間に浸透していた。しかし、2016 年に 1991 年以来 25 年ぶりの優勝を果たして以降、2018 シーズンまでの 3 連覇を果たすなど、広島東洋カープの快進撃が続いている。

2009 年に新しいスタジアムとして MAZDA Zoom-Zoom スタジアム広島が建設されたことをきっかけに、若い女性が確実に増え、広島市民球場運営協議会の調査でも、観客の約 40%を女性が占め、20%強が 20 代以下だという結果が出ている。つまり、観客の 10%弱が若い女性なのである。

そこで本研究では、「カープ」という存在が「カープ女子」の人生、いわゆるライフヒストリーにどのような影響を及ぼしているのかを明らかにしたいと考えた。

２．研究方法

本研究では、プロ野球球団である広島東洋カープの女性ファン、つまり「カープ女子」と呼ばれる人達を対象とし、調査を行った。本研究の「カープ女子」の定義は、女性および女性の心を持っている方で、カープを応援したいという人であれば、年齢・住んでいる場所に関係なく「カープ女子」と捉えることとする。調査時期は、令和元年 7 月 16 日～9 月 25 日までの 71 日間にかけてであり、調査には Google フォームを活用した。

３．主な結果と考察

全体の 8 割を超えるカープ女子の方が広島東洋カープという球団を自分の生活の一部として捉えており、9 割を超える方がカープを通して友達の輪を広げ、カープが勝つと元気になると回答していることから、全体的にみれば広島東洋カープがカープ女子のライフヒストリーに大きく影響を及ぼしているといえる。

しかし年代別でみると、特に 30 代・40 代の社会人の女性が、カープ女子の中心的存在であり、生活の一部にカープがあるといえる。

また、「母親ファンがカープ女子の生みの親である」という仮説も立てられた。

母親が財布のひもを握っている多くの家庭では、その母親がカープ女子となり、試合観戦に行ったり、カープグッズを集めたりすることで一家全体がカープを応援する家族になり、カープのためならお金を惜しまず使うという文化を作り上げたのではないかというものである。

一方、20 代の社会人の方や学生は、カープ以外にも、世の中を賑わせるような話のタネになるものはたくさんあるため、カープが好きではあるが、生活の一部とはいえないファン

が多いということも分かった。カープが勝つと日常生活でも元気が出ると答えた人が 9 割を超えていたため、カープが勝てば嬉しいに変わりはないが、カープが負けても特に気持ちが下がることがない人も 20 代のカープ女子に案外多くいることが分かった。

そのような人達には、チームの成績の善し悪しはあまり関係していないともいえると推察できる。

以上の考察より分かるとおり、カープ女子の中でも、30 代・40 代に向けたアプローチを続けていくことで、カープの人気は維持できるのではないかと考える。

しかし今後、益々広島東洋カープが人気球団になっていくには、より年齢層を絞り、コアな 20 代のカープ女子を増やしていく取り組みが必要であると推察できる。そのために、より多くのカープ女子に球場で観戦してもらい、いかに「カープファンで良かった」という思いにさせるかが大切であると考える。

４．結論

私自身、今現在広島東洋カープが強くなり、人気が増し、それによって全国に広島県の名前が発信されていることを大変嬉しく、幸せに感じている。

このブームを作り出した要因は、「球場のアミューズメント化」「カープ女子の話題性」などの芽をしっかり摘み、育てることにより、よりよい球団経営に結びつけた「広島東洋カープ」と、それをツールとしてうまく活用した地元企業、そしてなにより、脈々と受け継がれてきた「生まれながらにしてカープファン」という県民性の土台があったことだといえる。そしてその勢いが 2016 年のリーグ優勝をきっかけに一気に加速したのだと考えられる。

このように、「スポーツ×地元企業×県民」がうまくかみ合ったマーケティング戦略が地方創生の一つのヒントと言えるのではないかと考える。

今後もっとカープ女子が増えることによりカープの人気が高まり、カープ女子を中心に広島県全体が盛り上がることを期待している。

５．卒業論文の執筆を終えて

本研究を行うにあたり、テーマの決定から論文執筆に至るまで、長期にわたり、優しくも熱意のあるご指導をいただきました黒須充先生に、心より感謝いたします。

黒須先生には、学問的なことだけではなく、多面的なものの見方や考え方、自分で考え発言することの大切さを教わりました。

そして、生涯スポーツゼミナールの同期の皆さんには、卒業論文においてだけでなく、様な面でお世話になりました。互いの研究について話し合い、励まし合いながら過ごした日々は、私にとってとても大切な時間でした。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、質問アンケート調査にご協力いただきました皆様に深く感謝いたします。